

人は、人によって、人となる

一時間目の授業を参観していたときのことです。三年B組の国語が気になりましたので、残りの時間そこに滞在してしまいました。扱っていた教材は「握手」（井上ひさし作）でした。

この「握手」という作品に初めて出会ったのは、ずいぶん前だったと記憶しています。作者の井上氏について、「吉里吉里人（きりきりじん）」という作品を通して知ったのですが、それ以降は特に関心を持ちませんでした。

「井上氏は、どうしてこの作品を書いたのだろうか。」
「握手」と出会ったとき、私は素直にそう思いました。そして、彼の生い立ちを調べてみました。（作家は自分の生い立ちをモデルにして書いていることが多いからです。）

私の予想は的中しました。井上氏は少年時代に児童養護施設に入っており、修道士たちに面倒を見てもらっていました。作品の中の「ルロイ修道士」という名前の方はいなかったようですが、そのモデルになった優しい修道士との出会いはあったようです。百パーセント事実ではありませんが、彼の経験がモデルになってこの作品はできあがったと言えます。

中三の教科書にこの作品が載っていることに意味があると、私は思います。これまでですくと成長してこられた自分は、実に多くの人たちに支えられてきたはずで、「自分一人で成長してきた」などと高飛車な考えをもってはなりません。それを考えさせてくれる作品が、この「握手」です。

桜の様子、指言葉、握手の力関係、そして、握手を求めた順番……この作品の中で全てが逆転しています。井上氏もこの作品を書いた後に、お世話になった修道士からバトンを受け取ったかのごとく、キリスト教の洗礼を受けています。人は、人によって、人となっていくのですね。（六月二十二日 記）

